

実践力を身につけるための実習プログラムの構築 —学生の実習後の「保育者の資質と力量」についての振り返りの記述から—

小 島 千恵子

1. 問題と目的

本研究は、保育者をめざす学生の「保育」に関する意識に関する研究（本学紀要第34号）をふまえ、学生が保育者にはどのような資質や力量が必要だと認識しているかということに着目した。

保育者の資質や力量については、保育者の専門性という視点で様々な所で取り上げられ、議論されているが、保育現場では、保育者の専門性を求められるがあまり仕事が長続きせずに転職、辞職をする保育者が多く、保育者不足が日常的に起こっている現状がある。特に低年齢から預かる保育所は、保育士不足が深刻であり、保育士の数を確保することに日々翻弄されている。

子どもの命を守り、成長発達を保障する仕事に就いている以上、専門性を問われることは当たり前のことであり、重要なことである。保育の質や保育者への一層高い専門的な資質が求められ、養成機関には強い期待が寄せられていることが調査等でも明らかになっている（全国保育士養成協議会 専門委員会2013）。

保育者に憧れ、懸命に学び、念願の保育者として子どもと共に生活することができるようになったとたん、日々の保育活動の中で、保育の専門性を問われ、追い詰められて自信を失くしてしまう現実を見るたびに、保育者の専門性とは何か、保育者の資質とは、力量とは何なのかと、たびたび疑問に感じることがある。保育現場ではしきりに保育の専門性を問われているにもかかわらず、社会の中には保育者を「子守りをする人」「困った時に預かってくれる人」などと、公然と言われることも少なくない。幼稚園教育要領や保育所保育指針の中にも、「幼児と共によりよい教育環境を創造するように努めるものとする」「倫理観に裏付けられた専門的知識、技術及び判断をもって、子どもを保育する」と、専門的知識や技術に基づくことが記されている。保育の現状や保育者の日々の活躍、それを支える専門的知識や技術の

修得などの保育の内実や価値を広く社会に伝え、日々の保育を支えている保育者がもっと賞賛されるべきであろう。保育者も社会にその価値を認められることで自信が持て、さらに保育の専門性を磨こうとするのではないだろうか。このことについて、秋田は、発達134号（2013）の特集これからの保育の専門性「総論 保育者の専門性の探究」中で、子どもの命を守り育み、未来の社会を担う市民を育てる尊敬ある保育の仕事を具体的な実践の価値と子どもたちの育ちの事実を通して理解してもらう必要があると述べ、その内容として、保育者の地位の向上のためだけではなく、少子化の中で、子どもたちのよりよい育ちを保証することができること、人的にも物的にもよりよい保育環境が必要であり、そのためには保育者が本来の専門業務に専念できるあるいは、保育者がキャリアアップすることができる体制をつくることなど、保育者が専門性を高めることが、子どもと保育者、保護者が育ち合うことになる」と述べている。また、現在、保育に関わる制度的改革が進んでいて、子ども子育て三法に基づく改革が準備されているが、子どもたちの養護と教育の一体的な展開を担う「保育」の専門家にとって、「保育者」という呼称が、その公的使命を担う専門性や見識、ミッションを示す名称であることは変わらないとつけ加えている。

以上のように今、様々な問題や課題について議論されている「保育」あるいは、「保育者の専門性」について学生は、知識もなく、深く考えることもないだろう。ただ、憧れの「保育者」を目指して純粋な気持ちで養成校に入学してくるのではないだろうか。入試の面接の中でも、保育者を目指した理由について、「子どもが好きだから」「私が幼稚園の時の先生みたいになりたかった」「歳の離れた弟の育ちを見ていて、子どもの育ちに寄り添いたかった」「自分は世話好きなので保育者に向いている」など、保育者の専門性などには程

遠い回答が返ってくる。保育者に憧れ、「保育者になりたい」という純粋な気持ちを持続し続けるために専門性を身につける以前にまずは、「保育」という仕事の中で起こる様々なアクシデントを乗り越えていく力を身につけることが必要だろう。養成校では、保育者の資格を得るために専門知識を学ぶ一方で保育技術を身につけるために、保育現場に出て子どもとかかわりながら現職保育者に直接指導を受ける。この一連の課程の中で、精神的な側面も学ばせる必要がある。実はこれが一番難しいことは言うまでもない。学生は、養成課程の様々な実習の中で、体験的に「保育」を学ぶ。実習は学生にとって、子どもとかかわり、保育者の仕事を実際に見るよい機会であり、自分自身が目指すものを実感する絶好のチャンスであると考えられるが、体験的に「保育者」への夢と憧れを壊すことも学んでしまうこともしばしばある。また、養成校で習得したことを活かすことには繋がらない場面に遭遇することもある。様々な実習体験の中で学生は、「保育」、「保育者」にどのような資質や力量が必要であると感じているのだろうか。学生の保育者への憧れと夢を持続させるためには、養成校で何をどのように学ばせるとよいのだろうか。また、実習という体験的な保育の学びを養成課程の学びとして有効にするにはどのような指導が必要なのだろうかと考えた。

本研究は、紀要第34号で中心課題とした「実践力のある保育者の資質の要素を探ること」を踏まえ、実習の課程で保育者になるために必要な資質と力量はどんなことととらえているのか、実習後の振り返りの記述に着目して分析考察した。

また、この結果を踏まえ、実践力のある保育者を養成するための実習指導の具体的な方法やテキスト作成のためのポイントを導きだしたいと考えた。この点については、文部科学省の助成を受けて、先進的に取り組んでいる西九州短期大学を視察し（保育コンソーシアムあいち研究助成）、保育実習指導において実習効果を改善するための教育のあり方やプログラムの作成の手順について探り、その結果も合わせてまとめた。

2. 研究方法

(1) 調査対象者及び調査の時期

調査対象者：N市私立R短期大学保育科1年177名 2年130名 N市私立S大学教育学部保育・初等教育専修課程3年87名。調査実施期間：2012年9月～2013年1月。調査時期：教育実習・保育実習・施設実習 養成課程における実習回数5回のうち、短期大学保育科1年 実習1回目終了時 短期大学保育科2年実習すべて終了時 大学3年：実習4回終了時

(2) 質問紙の内容及び回答方法

質問紙調査の内容は以下の通りである。回答はすべて自由記述（複数回答可）とした。

質問項目：保育者になるために必要な要件について以下の項目ごとに自由に書いてください。

①保育者の知識・技術に関することについて

例：ピアノが弾けること、絵が描けることなど

②子どもとかかわりについて

例：子どもが好き 平等にかかわるなど

③保護者とかかわりについて

例：挨拶する 子どものことを話すなど

④保育者自身のことについて

例：明るい 元気など

⑤その他

①～④に当てはまらないことは⑤に書いてください。

(3) 調査結果の分析

質問紙調査については、それぞれの質問項目の自由記述から、その記述にある言葉や内容を抜き出して、KJ法を用いて分類し、分類ごとに言葉や内容の数を短期大学1年（実習1回終了）、2年（実習全課程終了）、大学3年（実習4回終了）毎に集計して比較した。

3. 研究の結果と考察

(1) 保育者の知識・技術に関すること

質問項目①保育者の知識・技術に関することの短期大学1年（実習1回終了）・大学3年（実習4回目）・短期大学2年（実習全課程終了）の回答はFig.1・Fig.2・Fig.3のとおりであった。

短期大学1年の実習1回終了の結果は、「ピアノ

ノが弾ける」という記述が大半を占めていた。1年入学時から、ピアノのレッスンに励む学生、上達せず悩む学生様々な状態で初めての実習に行き、実習先の幼稚園でピアノをうまく弾く保育者を直接見たことでやはり「ピアノが弾ける」ことが重要であると感じた様子うかがえた。子どもの発達理解や遊びを知っていること、絵本・紙芝居がうまいという記述は同じ様な記述数であった。適切な援助については、細かく出てきたものをまとめた数で表示したが、具体的には実習で観察した保育者が行っている排せつのさせ方や衣替えのさせ方など、具体的な援助場面が記述されていた。

大学3年の実習4回終了時の結果は、「子どもの発達理解」が大半を占めた。「ピアノが弾ける」はほぼ半数であった。他の項目については、同じような記述内容であった。適切な援助の具体的な内容は、短期大学1年とは違い、保育の準備の仕方や環境構成、子どもの具体的な援助方法について記述されていた。この大学の実習は2年からであり、保育所から始まる。ピアノが弾けることも、子どもの発達の理解も必要であると認識していることがうかがえた。各養成校の実習の方針によって記述の様子や内容が異なることは考えられるが、実習回数を重ねるごとに、ピアノも大切、子どもの発達理解も大切であると、認識の仕方に幅ができてくることが推察された。短期大学2年の実習全課程終了時の結果は、「ピアノが弾ける」「子どもの発達理解」という記述が多いが、「専門的な知識」など、記述内容の種類が増える傾向を示した。専門的な知識の中には、障がい児への理解や対応の仕方があった。実習回数を重ねるたびにより具体的な内容に着目できるようになっていることがうかがえた。細かく記述されているもの、大まかに記述されているもの、その差も実習回数を重ねる中で個人差となって表れていることも着目すべき点である。

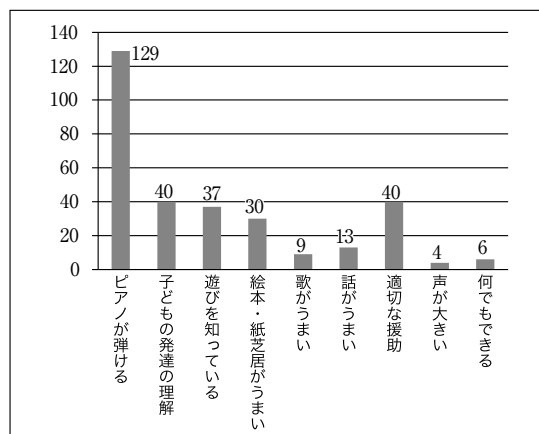


Fig.1 実習1回終了時の保育者の知識・技術に関すること (回答数)

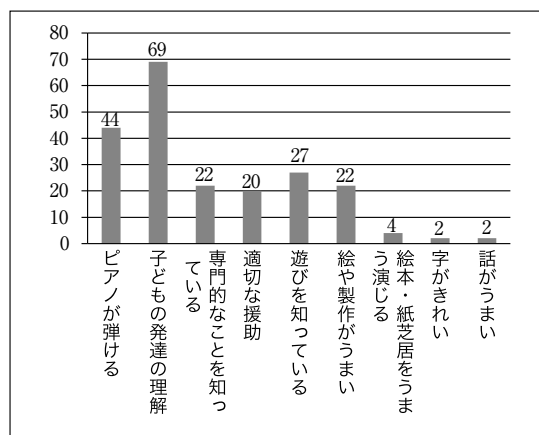


Fig.2 実習4回終了時の保育者の知識・技術に関すること (回答数)

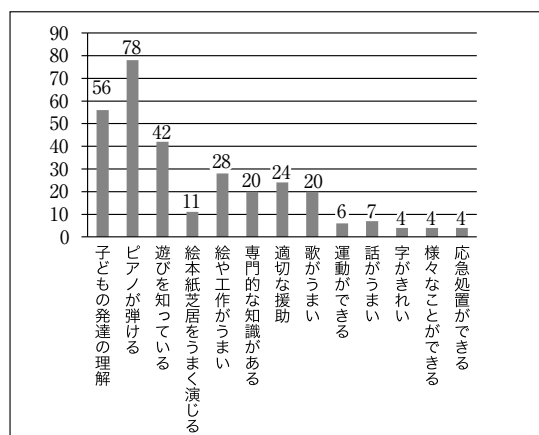


Fig.3 実習全課程終了時の保育者の知識・技術に関すること (回答数)

(2) 子どもとのかかわりについて

質問項目②子どもとのかかわりについての短期大学1年(実習1回終了)・大学3年(実習4回目)・短期大学2年(実習全課程終了)の回答はFig.4・Fig.5・Fig.6のとおりであった。

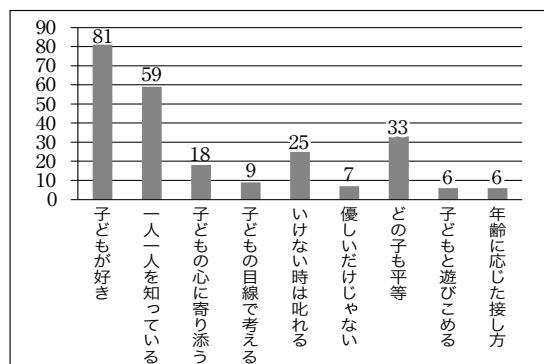


Fig.4 実習1回終了時の子どもとのかかわりについて(回答数)

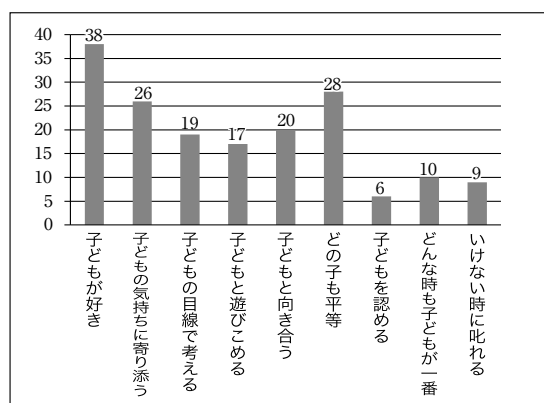


Fig.5 実習4回終了時の子どもとのかかわりについて(回答数)

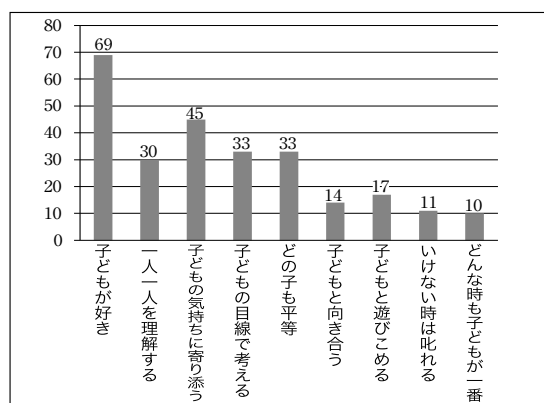


Fig.6 実習全課程終了時の子どもとのかかわりについて(回答数)

実習の回数に関係なく、「子どもが好き」という記述が多かった。また、「どの子にも平等である」という記述もほぼ同じであった。実習1回終了の短期大学の1年の記述の中に少数ではあるが、「子どもに優しくかわるだけではない」という記述があった。子どもが好きで子どもに優しく接することだけでは保育者の仕事はできないと実感した様子が記述の様子からうかがえた。「子どもに寄り添う」「子どもの目線で考える」は、実習回数が増え、保育を学ぶことを重ねると増えている。実習する中で子どもの理解の仕方やかかわり方を保育者をモデルにして体験的に学んでいる様子がうかがえた。

(3) 保護者とのかかわりについて

質問項目③保護者とのかかわりについての短期大学1年(実習1回終了)・大学3年(実習4回目)・短期大学2年(実習全課程終了)の回答はFig.7・Fig.8・Fig.9のとおりであった。

実習回数に関係なく「明るく挨拶する」「子どものことを伝える」という記述が多かった。実習指導の中でも挨拶は大きな声ですするという指導を受けていることや、保育者が保護者とかわる時、明るく挨拶している姿を見ていることからの記述であることがうかがえた。また、子どものことを伝えることについても、実習中毎日、保護者の子どものことを伝えている様子を観察できたことや、実習内での反省会で、担当保育者とこのことについて話したり、指導を受けていたりしたことが推察された。「相談に乗る」「保護者の心を受けとめる」というような、少し深いかかわりを持つことについては、実習回数を重ねることで、保育者の資質として必要であるとわかってくるようである。

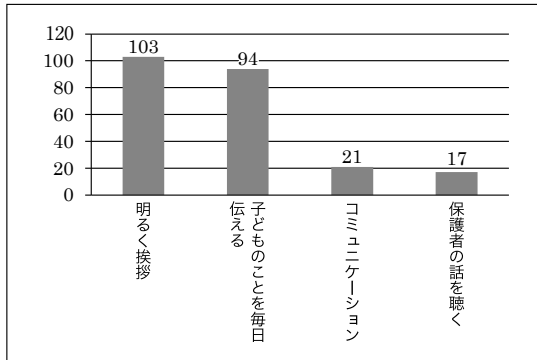


Fig.7 実習1回終了時の保護者とのかかわりについて (回答数)

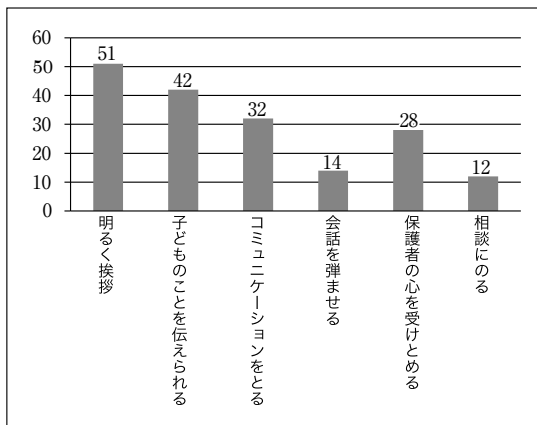


Fig.8 実習4回終了時の保護者とのかかわりについて (回答数)

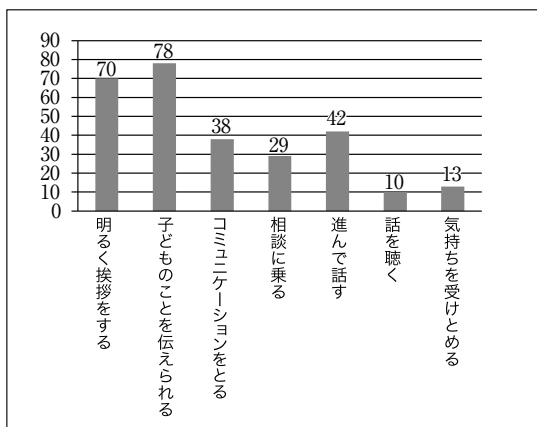


Fig.9 実習全課程終了時の保護者とのかかわりについて (回答数)

(4) 保育者自身のことについて

質問項目④保育者自身のことについての短期大学1年(実習1回終了)・大学3年(実習4回目)・短期大学2年(実習全課程終了)の回答はFig.10・Fig.11・Fig.12のとおりであった。

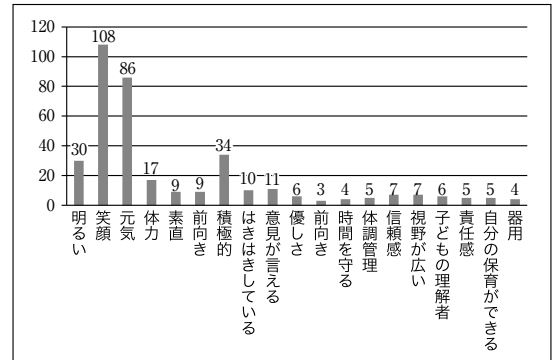


Fig.10 実習1回終了時の保育者自身のことについて (回答数)

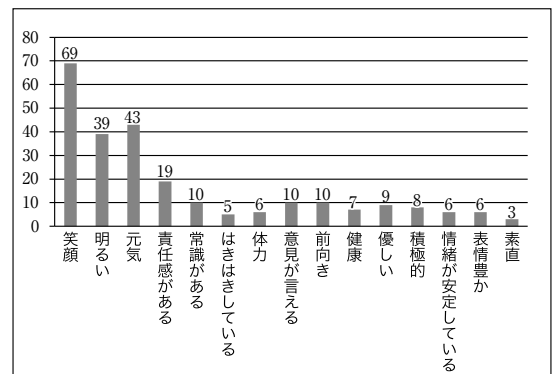


Fig.11 実習4回終了時の保育者自身のことについて (回答数)

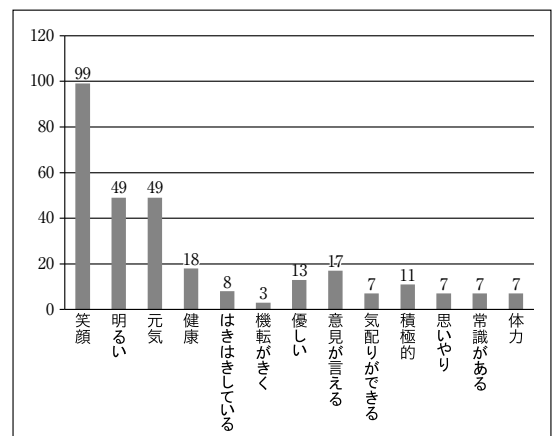


Fig.12 実習全課程終了時の保育者自身のことについて (回答数)

実習回数に関係なく、「明るく、笑顔、元気、積極的に」という記述が多かった。実習指導などで、実習の出る時の基本として指導されることが記述されていることが推測される。実習1回終了では、記述項目の種類が多く、いろいろ模索している様子がうかがえた。実習を重ねていくと、「明るく、笑顔、元気、積極的に」という記述に加え、学生自身の考え方や出会った保育者の姿から学んだことなどが記述されていた。記述内容も、羅列に終わらず、整理しながら記述している様子がうかがえた。

(5) その他

質問項目①～④に当てはまらない項目については⑤に記述するよう指示したところ、短期大学1年（実習1回終了）・大学3年（実習4回目）・短期大学2年（実習全課程終了）の回答はFig.13・Fig.14・Fig.15のとおりであった。

その他に挙げている項目のほとんどは「保育者自身のこと」に関係があるものが多く、この項目も保育者の資質に繋がるものであった。「遅刻をしない」「進んで仕事をする」は、どの実習回数の群の中にもあった。どの実習においても、遅刻をしないように気をつけていた様子がわかった。また、自分でできることは、進んで申し出て動くということについて、実習の事前に指導を受けていたことを実習中にも重ねて指導されていたことが推察された。

実習の全課程を終了している学生の記述の中には、「体調管理」という記述が多かった。実習の時期が冬ということもあって、体調を崩した実感が記述されている様子もうかがえたが、卒業間近の実習ということや、就職の内定を受けている学生もいることから、社会に出て働くという意識からの記述ということも予測された。実習1回終了の学生の中には「掃除ができる」ことを記述していた。「掃除ができないと、ほんと困るよ」と実習後話している学生もいた。初めての实習で、何もわからないが、とにかく掃除は一生懸命やったという実感なのだろう。

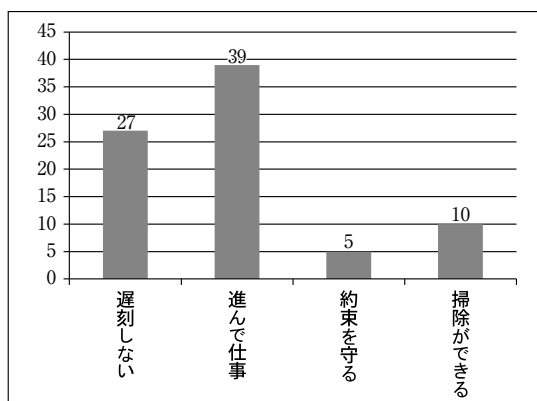


Fig.13 実習1回終了時 その他（回答数）

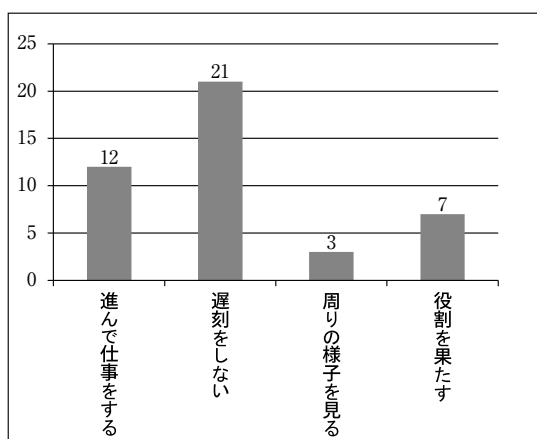


Fig. 14 実習4回終了時 その他（回答数）

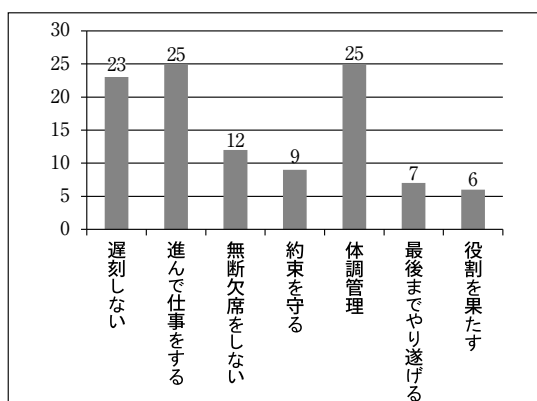


Fig.15 実習全課程終了時 その他（回答数）

4. 調査のまとめと総合考察

以上、①～⑤項目について調査を行った結果、保育者になるためにはどのような資質や力量が必要であるのか、実習経験を重ねることで、その内容に違いがあることがわかった。その違いの要因は、実習園で出会った保育者の動きや子どもに対する声かけ、保育者の人柄などであるようだ。

また、今回の調査で、保育者養成期間4年の学部生の調査も行った。記述されたものをことばだけで整理すると、短期大学と同じもののようであるが、記述の痕跡を辿ると、年齢差や、生活経験の広がり、考え方の深まりなどが、少なからず記述内容に影響している様子がうかがえた。短期大学は、入学からわずか半年で教育実習を行う。そして、2年間に5回の実習を行って、息つく暇なく就職していくことになる。4年制大学では、入学して1年半程の助走期間を経て、実習を行うため、時間的ゆとりがあり、様々な経験がこの間にできる。このことが影響していることも十分考えられるのではないだろうか。

短期大学、4年制大学どちらの養成課程でも、実践力のある保育者を養成することが、日本の幼児教育や児童福祉を支えることになる。そのためには、現任保育者や学生の現状を確実にとらえて、保育者をめざす学生から現任保育者へという、キャリア支援計画を構築する必要があると考える。そのとりかかりとして、まずは、養成課程の期間に合わせた具体的な実習のプログラムを立案し、実際に学生指導に活用しながらよりよいプログラムを創り上げていく必要があるだろう。その内容は、学生に届きやすくより具体的なものであることが必要であろう。

5. 実習プログラム構築に向けて

実践力のある保育者養成のプログラムの構築をめざして、学生調査を行う一方で、保育コンソーシアムあいちの研究助成を受けて、保育実習指導において実習効果を改善するための教育プログラムや実習テキストのあり方を探るため、西九州短期大学を訪ね、保育実習指導を効果的に行うための教育プログラムや学生が理解しやすい実習テキストを作成する手立てや保育実習指導がどのようなプログラムで行われているのか、その現状につ

いて視察し、情報を得ることができた。

実習を支える環境としては、実習センターを設け専任が常駐して、日常的に実習の相談に乗ったり、実習指導を行ったりしていた。実習園の様々な情報と共に学生の実習の記録が実習園毎にファイルされ、いつでも閲覧できるようになっていた。実習園が決定したところで、学生がいち早く実習園の細かな情報を入手できるようになっている。この環境は、学生にとって実習の不安を取り除くためにとても良い環境であることがわかった。常駐する専任に保育経験があることが望ましいだろう。また、学校専用のオリジナルな実習指導テキストがあり、その内容は大変詳しいものであった。実習の目的から、事前準備や事前学習、実習の服装や持ち物、名札の作り方やその例、実習日誌や指導案の書き方、具体的な遊び、その遊びを責任実習で行う時の指導案、事後学習の取り組み方など、困ったらこのテキストを見ればすべてわかるようになっていた。事前学習の内容の中には、今回の研究テーマである、保育者の資質や力量とはどういうものかということについても触れられていた。このテキストは、将来保育者として働くようになってからも役立つものである。保育者として働き、実習生を指導する立場になった時にも活用できるものになっていた。

視察したものをすぐに本学に取り入れることはできないが、可能なことから少しずつ取り組み、本学独自の実習プログラムを構築したいと考え、構築第一歩として、以下のような取り組みを行うこととした。

- ①「めざす保育者像」持つために、保育現場で保育する保育者を見て感じる。
- ②出会った保育者がもっていた資質・力量を整理する。(モデルにしたい、したくない両面)
- ③「めざす保育者」に近づくために今何ができるか、具体的にできることをまとめ、日々の課題にする。
- ④日々の努力や成果をまとめながら、次の実習目標を立てる。(実習の自己課題)

6. 今後の課題

今もそして今後も保育養成の中で「実践力のある保育者」の基礎づくりは必修であろう。

環境を通して行う保育を実践するための基本を考えた時、やはり保育者がどう子どもと向き合うのかという視点を抜いて考えることはできない。「教育は人なり」と昔から言われてきたが、本当にそうであると実感する。高杉（2006）は、子どもがのぞむ保育者という視点から、保育者の役割を考える時、子どもは保育者に何を求めているのかという問いを自分に返してはどうかと解いている。子どもと共にある生活という考え方が、いつの間にか保育者と共にある生活という考え方になってしまうとはいないだろうか。実践力のある保育者とは、子どもや保護者と共にある生活を実践できる人なのではないだろうか。

保育者の資質、力量について整理する時、保育者の前に人間として生きるということを実感することは言うまでもないが、これができない現状があることは確かである。実習指導を行う時、「これは当たり前のことだよ」「何度も指導しているよ」と学生に念押しすることが多くなっていることに気づくことがある。

高杉（2006）が「保育者の役割を考える時、子どもは保育者に何を求めているのかという問いを自分に返してはどうか」と述べているように、「学生は指導者に何を求めているのか」と自分に問い直すことが必要なのだろうと実感する。指導する中で、保育者をめざすのならばこれだけは伝えたいという願いばかりが先行していることに気づかされることがしばしばあり、保育経験のある実習指導者は、実習指導のあり方を考えた時、保育と同じあることを実感する。そして、学生が自ら、保育者になるという自覚のもとに、自分で気づき行動に移すことができるような指導が、学生が保育者として働くようになった時を見据えての真の指導になるのではないだろうかと考えるのである。

保育者をめざす学生は、未熟ながらも、養成校に入学してから、「子どもが好き」だけでは保育者になれないことを実感して日々精進している。このありのままの学生の姿を受けとめて、プログラムを作ることが必要であろう。

本学は保育養成2年の短期大学であるため、ゆとりがあるわけではないが、2年間を見据えたプログラムをつくり、保育者を養成するということを全学的に共通理解し取り組めば、不可能ではないだろう。そのために、今後は何をどうするかを具体的に考え、細かく実践しながらその成果と共に提案し、プログラムの全体的な構築をめざしたい。

引用・参考文献一覧

- 秋田喜代美（2013） 総論 保育者の専門性の探究 発達134号 pp14～15 ミネルヴァ書房
平成24年度専門委員会課題研究報告書（2013） pp13～17, pp313～317 全国保育士養成協議会
高杉自子（2006） 子どもとともにある保育の原点 Pp249～258 ミネルヴァ書房
実習指導テキスト 改訂版（2009） 西九州大学・短期大学部 幼児保育科

【付記】本研究は、日本保育学会第66回大会（発表論文集 p 806）保育者をめざす学生の「保育」に関する意識（2）—保育者の資質・力量の要件について（実習経験の比較から）—を加筆修正してまとめたものである。

保育コンソーシアムあいち（2012）の研究助成を受けて視察して得た結果を本研究の参考にしている。

Construction of the training program to acquire a practice power — From the description of the swing return marks about "Nature and the ability of the nursery teacher" after the training —

Kojima, Chieko*

本研究は、紀要第34号で中心課題とした「実践力のある保育者の資質の要素を探ること」を踏まえ、実習の課程で保育者になるために必要な資質と力量はどんなことととらえているのか、実習後の振り返りの記述に着目して分析考察した。調査の結果、保育実習を重ると、保育の知識や技術に関すること、子どもとのかかわりについて、保護者とのかかわりについて、保育者として必要な資質や力量についての認識が細かくなっていくことがわかった。また、保育者として身につけなければならない資質については、深く考えることができるようになっていくことが見えてきた。実習で、保育について体験的に学ぶことや近い将来、自分もなるであろう保育者を目の当たりにすることは、大変刺激も大きく、意欲や期待を高めることに繋がるようである。この実習の学びを有効にするためには、実習の事前・事後の指導を確実に行っていく必要がある。実習での学びを学生が自ら整理したり、考えたりできるようにすることで、保育者になる自覚を高めていけるようになる。そして、実習毎に積み重ねていくことが重要であろう。学生が、保育者になることを自覚し、実習を楽しみにできるような指導をしていくためには、指導内容がわかりやすく、より具体的であることが必要である。そこで、今回の調査を踏まえて、実践力のある保育者を養成するための実習指導の具体的な方法や、テキスト作成などの指導法を探り、2年間を見据えた実習指導プログラムを構築するための手立てとしたいと考えた。

キーワード：保育の資質と力量、実習、学生の意識、実習指導、実習プログラム

*Nagoya Ryujo Junior College